

尊攘運動の思想的指導者として名を馳せていた、  
水戸斉昭の懐刀、藤田東湖との出会いもその頃であった。  
叔父椎原与衛門にあてた手紙がある。

**「東湖先生も至極丁寧なる事にて、かの宅へ差越し申候と、  
清水に浴し候あんばいにて、心中一転の雲霞なく、  
ただ清浄なる心に相成り、帰路を忘れ候次第にごさ候」**

東湖の学問、人格、識見に西郷はすっかり参っている。

自分は、仕事の性格上、色々な立場、年齢、性格の方達とお会いする機会が多いが、

「あの人と会ったら清水を浴びたようなあんばいで、  
清浄な心持ちになってしまい、お話を伺っていたら、  
帰る時間も忘れちゃったんですよ」

などという出会いはそうざらにない。

これは、**相手が、純粹さに加えて本物の知識、本物の勇気、  
そして本物の志の持ち主である本当の本物であること、  
と同時に、本人の精神があるレベルにあり、  
透明な素直さを持ってそれを感知できる素養が無くては、  
そんな感覚は体験できまい。**

藤田も凄かったのだろうが、若い西郷も素質充分、  
この手紙には、西郷が一流の人物に会えた喜びを  
表している以上の何かが含まれている。

これを膨らませてゆくと・・・・・・・・

例の増田宗太郎と西郷があっている場面が目には浮かんでくる。

若い西郷を増田に、藤田東湖を西南戦争末期時の  
西郷に置き換えて二人が会話している様子を想像してみると、  
藤田西郷の邂逅とどこか似通った雰囲気が漂う。

当時、敗色の濃くなった薩軍の中にあって  
西郷に出会った増田は、

若かった西郷が藤田にあって感じたものと  
同質の何かを西郷に対して感じたのではないだろうか・・・・・・・・。